

検 査 部

野村 文夫

検査部の創設（1966年）から1970年代前半までについては、降矢震初代教授が「千葉大学医学部百周年記念誌」（1978年刊）に詳述され，その後第2代の米満博教授が「千葉大学50年史」（1999年刊）にご自身が検査部長を担当された時代について述べられている。本稿では教授（検査部長）としては三代目となる野村が着任した1999年以降について記す。

着任とほぼ同時に，従来放射線部が担当していたRIインビトロ検査が検査部に移行し，細菌検査オーダーリングシステムが開始された。1999年末はいわゆるコンピューター西暦2000年問題の真ただ中で，結果的に幸い何事も起こらなかったが，検査部関連コンピューターの誤作動など不測の事態に備えて12月31日は私自身も含めて一部のスタッフが検査部で新年を迎えることとなった。

2000年4月からは懸案であった日当直業務を二人体制で開始した。当初は血液・生化学関連業務のみで開始したが，翌年には輸血関連業務，髄液検査，一部の細菌検査業務も追加した。

2001年4月には遺伝子検査室が設置され，2002年5月からは生理検査部門オーダーリングシステムの運用が開始された。遺伝子検査室では感染症の核酸検査に加えて，ヒトゲノムを対象とする遺伝学的検査も神経変性疾患，家族性腫瘍などを対象に開始したところ，検査前後の十分なケアが必要なケースが増加してきたため，2003年4月に遺伝子検査室に併設する形で遺伝カウンセリング室が設置された（2008年2月より遺伝子診療部として独立）。

米満前部長のご尽力により1998年7月に外来中央採血室が稼働し，同時に入院患者の病棟採血のための採血管の配布サービスがスタートしていたが，2004年5月からは一部診療科の入院患者の採血も中央採血室が担当することとなった。

1997～1998年度の概算要求により設置が認められて稼働していた検体検査自動化システムが徐々に老朽化したため，2007年のD棟の改修に合わせて更新されることが病院として決定されたので，2005年から部内で次期検査システムの検討を開始した。

検査部では2002年より独自に外部の機関に財務調査を依頼し，収益性分析や生産性分析を通して，主要指標である材料費率，人件費率，減価償却費率を

把握していたので，それらのデータを次期システムの立案において活用することができた。

2006年5月に疾患プロテオミクス寄附研究部門が設置され（野村が部門長を兼任），検査部関連の教員が2名増員となった。2006年～2007年は検査部としてA棟，D棟の改修工事に伴い，相次ぐ引っ越しと仮設棟での業務および新システムの導入と稼働を病院の日常検査に支障を来すことなく遂行することに検査部一丸となって取り組み，無事新システムに移行することができ，現在に至っている。

人事面について見ると，教員は研究院の分子病態解析学講座と一体となっている。菅野治重講師が病院検査部・感染症管理治療部に配置換えとなった後に朝長毅が准教授となった（2000年7月～2008年12月在籍。2009年1月より独立行政法人医薬基盤研究所プロテオームリサーチセンター長として転出）。その後は本学第二外科（現先端応用外科）出身の松下一之が2007年7月講師に就任し，現在に至っている。助手（助教）は菊野薫（1993年5月～2000年3月）の後，牧野康彦（2000年4月～2001年6月），根津雅彦（2002年4月～2007年12月），須永雅彦（2003年4月～2007年12月）が歴任し，現在は西村基（2005年4月～），澤井撰（2009年4月～）が在籍している。牧野康彦は新しい分子病態解析学講座の基礎作りのために多大な貢献をされたが，2001年6月24日病のため志半ばにして世を去った。

2004年3月，大澤進技師長の九州大学医学部保健学科教授への転出，久保勢津子副技師長の定年退任に伴い，澤部祐司が第三代技師長に就任し，渡邊正治が副技師長に昇任した。その後，2008年の堀内文男副技師長の定年退任後，糸賀栄が副技師長となった。

中央診療部門である検査部の一義的な役割は日々の診療のための臨床検査を正確，精密かつ迅速に行うサービス業務であることは言うまでもないが，大学病院の検査部として臨床検査医学の卒前・卒後教育も重要な業務であり，医学部生だけでなく，臨床検査技師養成課程をもつ5大学から実習生を受け入れている。

また先進医療を担う大学病院の検査部として新たな検査法を開発・実用化することも重要なミッショ

第2章 医学研究院・医学部、附属病院の歩み

ンと考えている。そのためには検査医学講座（分子病態解析学）と検査部が一体となる必要がある。その実現のため、野村の赴任直後から、現場の臨床検査技師の社会人大学院入学を奨励し、現在ではすでに6名の医学博士と5名の医学修士が誕生し、さらに5名が大学院に在籍中である。

生活習慣病をはじめとする慢性疾患が増加し、悪

性腫瘍の超早期診断の重要性が叫ばれ、個別化医療の推進が求められる昨今、病院検査部の役割は今後さらに増すと同時に多岐にわたっていくことが予想される。大学病院にふさわしい検査部の構築に向けて、研究院の分子病態解析学講座との連携を密にしながら総力で取り組んでいく所存である。

（のむら ふみお）



21年度検査部親睦会 平成21年12月11日